

Dies irae (別世界)

機械龍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャンバラで水銀の蛇と黄金の獣、そして永遠の刹那が戦い、黄昏の女神が座についた世界とは別の世界の話。

ドイツはソ連と戦争をしていた。そのきつかけは小さなものだったが、それが発展し、世界を巻き込む巨大なものとなった。両国は戦争に勝つために、軍事力の他に魔術力も磨いていた。その賜物として生まれたのが聖遺物。人間を取り込み、その人間の渴望を歪んだ形で叶える、魔法の道具。ドイツにはその扱い方を最初から知っていたカール・クラフトIIメルクリウスという人物がいたため、沢山の聖遺物を所有することが出来た。その甲斐あってか、表向きでは別の大国が介入し、ドイツは敗戦国ということになったが、表には出ない裏の魔道の面では圧勝ということになった。これは、そんなドイツに生まれた聖遺物の使徒の集団、聖槍十三騎士団黒円卓の物語。

人物紹介

ロートス・ライヒハート：主人公。日本にいた時に藤井蓮を名乗っていた。聖槍十三騎士団黒円卓に所属し、首領、副首領、首領代行に次ぐ副首領代行という役職に就いている。聖槍十三騎士団黒円卓第十四位。ツアラトウストラ。

ラインハルト・ハイドリヒ：本編と変わらず、聖槍十三騎士団黒円卓の首領であり、カール・クラフトの親友。

聖槍十三騎士団黒円卓第一位メフィストフェレス。

カール・クラフト：本編と変わらず、聖槍十三騎士団黒円卓の副首領。記憶喪失。聖槍十三騎士団黒円卓第十三位メルクリウス。

櫻井螢：ロートスが日本にいた時に知り合った日本人。聖槍十三騎士団の日本支部に所属していた。現在はドイツにある本部に所属している。日本支部にいた時は副支部長をしていた。聖遺物を所有している。聖槍十三騎士団黒円卓第五位レオンハルト・アウグスト。

遊佐司狼：ロートスの旧友であり、親友である。日本人。聖槍十三騎士団には所属していないが、聖遺物は所有している。ゲオルギウス。

ヴェヴェルスブルグ城：黄金の髑髏の城ではなく、普通の城。聖槍十三騎士団黒円卓の皆が生活している。

目次

ロートス・ライヒハートツアラトウストラ・ユーヴァーメンシユ	
1	
創造	3
焦熱した世界	9
聖剣七兵団	14

ロートス・ライヒハートⅡツアラトウストラ・ユー
ヴァーメンシユ

俺の名前はロートス・ライヒハート。とある超人集団で活動している、元死刑執行人だ。

今日も元気に仲間たちの変人行動で頭を抱えています。

「ツアラトウストラ。少しいいか？」

俺の部屋に黄金の髪と眼をした、人類の黄金比と言うべき人間が入ってきた。

「なんだ、ラインハルト」

「カールが…記憶喪失を起こした」

「…は？」

「だから、カールが記憶を失ったと言ったのだ」

「で、なんで俺のところに来る。アンナとかが適任なんじゃないか？」

すると、ラインハルトは困ったような顔を見せ、俺にこう言った。

「頼むよ、藤井蓮くん」

「はああああ…。チツ。わかったよ。どこにメルクリウスはいる」

「いつもの副首領室だ」

副首領室に着いた。

「メルクリウス、大丈夫か」

ノックをし、ドアを開けると椅子に座り、ウザったいポーズをした、

青い長髪の影のような男がいた。

記憶失つても、滲み出るウザったさは消えないんだな。

「君は…誰だ」

本当に記憶を失ったようだな…。

「分からないのか。ツアラトウストラだ。ロートス・ライヒハートⅡ

ツアラトウストラ・ユーヴァーメンシユ」

「ツアラトウストラ…？…いや、すまない。思い出せない」

「そうか」

俺はラインハルトを呼び、小声で言った。

「こいつこのままの方がいいんじゃないのか？そっちの方が俺らにとって良いような気がするぞ」

「まあそうだが、見ろ。どちらにせよウザさは消えないらしい。だから、記憶があった方がこっちにとって、なにかと有益なんだよ」

『緊急、緊急。前線に聖遺物の使徒が現れた模様。至急応援求む』

城内に緊急警報が鳴り響いた。

「はあ、仕方がない。聖槍十三騎士団黒円卓の団員に告ぐ。レオンハルト、ザミエル、バビロン、ツアラトウストラの各人は至急、前線に向かえ。その場の指揮権はツアラトウストラが有する」

その場でラインハルトが言うと、城中に響き渡った。

「Jawohl mein Herr!」

ツアラトウストラ以外の各々がその場で言った。

「私はカールの件に関して、精進するよ。頼んだぞ、ツアラトウストラ」

そうラインハルトが言ったその刹那、窓からロートスは飛び出して行った。

街の上を飛んでいると、すぐに先程の3人と合流出来た。…いや、バビロン——リザ・ブレンナーの攻撃手段であるトバルカインも一緒にいた。

「藤井君、命令をお願いします」

レオンハルト——櫻井螢がすぐにそう言った。

「そうだな…。櫻井は俺について来い。シスターとカイン、ザミエルは俺らと別の方に行ってください」

「了解したわ、藤井君」

「了解だよ、ツアラトウストラ」

「ここから見て、ちょうど右斜めと左斜めに件の聖遺物の使徒がいるようだから、俺らは右に、シスターたちは左に行ってください。では」

ロートスの指示に従い、櫻井はロートスについて右に、リザとカイン、ザミエル——エレオノーレは左に行った。

創造

「アレか。一般兵が苦戦してるな…」

近くの木にとまったロートスたちは、様子を伺っていた。

目線の先には、聖遺物の使徒と思われる人物がドイツ兵を次々に斃していた。

「創造の能力はなんだろう」

「まず創造まで行ってるかが分からないと。シユピーネやシスターみたいに形成で止まってる可能性もある」

「それは無いんじゃないかな。あんなに戦い慣れしてるし、多分、聖遺物も扱い慣れてるよ」

たしかに、聖遺物と思われる機関砲を器用に使い、一般兵を殺し続けていた。

「どうする？私が先に行こうか？」

「お前を駒にするようでなんか嫌だけど、…頼む。創造はあまり使わないよ」

「わかった」

木から飛び出した櫻井は、奇襲をしようとしているらしい。

音もなく、その首を狙いに行く。

すると突然、敵の聖遺物の使徒が動きを止め、櫻井が飛んでいる方向に拳を振ってきた。

「ッ!？」

間一髪、避けることが出来たが、気づいていたとは…。

「奇襲だなんて汚い手は使うなよ、嬢ちゃん」

顔を合わせた。

その人は紫色の長髪に同色の眼。高身長 of 男性だった。

(…ザミエルみたいだな)

「相手が気づいていないと思ってるんだから、奇襲するのは当然でしょう？それとも、わざと発狂しながら突っ込んでこいとも言おう？」

「ははは、面白いこと言うね。ま、当然のことか」

一般兵をあしらいなから質問に答える。

「…こいつあ強そうだな。櫻井、無茶しなきやいいけど」

「ドイツ軍の兵士諸君、攻撃をやめたまえ。これはラインハルト・ハイドリヒ大将閣下の言葉である」

「ほう。賢明な判断だ。ここで無駄死にさせるより、あとに温存した方が良いという考えか。…良いだろう、私も見逃してやろう」

ドイツ軍の一般兵が早急に去っていく。

「さて、ここには私と嬢ちゃんしかいない訳だが、…名乗ろう。私はヴィクトル。本来は空軍なのだが、聖遺物と契約してからは陸軍に編成されたんだ」

「私も名乗らなきやいけない雰囲気になってきたか…。仕方ない。私は…レオンハルト。軍の特別部隊に所属しています」

「レオンハルト？日本人じゃないのか？」

「こつちに来て改名したんです。…そんなことはいいんですよ。あなたの聖遺物はそれですか」

機関砲を指さして問うた。

「そうだよ。これだけじゃないけどね」

「それだけじゃない？聖遺物は基本1つのはずです。それ以上だと身体が持たない」

「それは戦いながら紐解いていけばいいよ」

そう言うと、ヴィクトルは櫻井に向けて銃撃を始めた。

「ッ!!」

完全な不意打ちだったため、太もも部分を銃弾がかすめた。

「形成！」

赤い刀が形成された。

「ハアアアアアッ!!」

大きく振りかぶり、ヴィクトルに斬りかかった。

(相手の武器は銃だ。白兵戦ならこちらが有利のはず！)

ヴィクトルは機関砲を振り上げ、櫻井の攻撃を受け止めた。

かなり重いはずの機関砲を振り上げるとは、なんて怪力なんだ…。

「おそらく、白兵戦なら有利だという考えだろう。…ふふ、そりやそう

でしょう。コレなんだから」

笑いながらそう言う。

「では、私の聖遺物の真価を見せるとするか」

そう言うのと、機関砲が消え、剣が出てきた。

「私の聖遺物は形が存在しない。故に私が形作らなければならない。そう、私の聖遺物の形成は、『私の思ったものが形成される』というものだけ！」

「喋ってばかりで、手が止まっていますよ！」

櫻井が激しく攻撃を始めた。

それをヴィクトルが受け流す。

「やはり、面倒だ。おそろくあなたは強いだろう。だから私は卑怯な手を使うよ」

「なに?!」

ヴィクトルの周りをそよ風が吹く。

「創造Brīah

絶対 対 王 政 強 制 遂 行
Absolutnaya monarchiya

詠唱すると、櫻井の身体が動かなくなった。

「…!?これは…!」

「私はね、ずっと虐げられていたんだよ。村に住んでいた子供時代、学校に行けばクラスの馬鹿どもから理不尽な暴力を振るわれ、家でもそうだった。だから軍人になった。だが、それでも上の人間からはゴミのように扱われた。だから私の渴望は『絶対的な権力が欲しい』というものになった。そして具現した能力は『命令を相手に強制的に実行させる』というものだ」

「なんてチート能力…」

「君…レオンハルトって言ったか、君に命ずる。『その刀をお前の首のところに持ち上げろ』」

!!!???

「え!」
言われた櫻井は、その手に持つ刀を首のところに持ち上げ、そこに刺す準備を完了させた。

『自害しろ!』

櫻井は首にそれを刺し、自殺した…。

と思ったが、よく見ると、先程の状態から変わっていない。

「それをする必要はねえぞ。櫻井」

男が立っていた。

そいつは刀を素手で持ち、抑えている。

「あいつ…！」

「あなたは、遊佐君!？」

オレンジ色の髪に赤い服。普段着で司狼は立っていた。

「お前は誰だ」

ヴィクトルが質問する。

「あ？俺はケンカが好きない一般人だよ」

「だったら、『消え失せろ一般人』」

ヴィクトルがそう言ったが、司狼には何も起こらない。

「効かねえ効かねえ。一般人つても、ただの一般人じゃないからな。形成」

司狼がそう言うのと、棘鎖を辺りに漂い始めた。

「それは…！」

「そ、聖遺物だ。そんで…」

数秒ためると、

「太・極——マリグナント チューマー アポトーシス無間身洋受苦処地獄!!」

太極の詠唱をした。

司狼が太極を展開させると、空が幾何学模様に変化した。

「くそー、『これを終了させろ』！」

「やなこった。つつーか効かねえんだけどな」

櫻井の腕も降りている。

「俺の太極はな、『あらゆる異能を無効化する』って能力なんだよ。だから、お前の創造も効かない」

「じゃ、じゃあ『レオンハルト、自害しろ』！」

しかし何も起こらない。

「なに…!？」

「無効化するつつってんだろ。俺以外の人に対してもそれは適用され

る。こいつがもし創造を使おうとしても無効化されるわな」

「あなたが戦っても勝てる確率はほとんどゼロに等しい。さあ、どうする」

櫻井がヴィクトルに強気で問うた。

「引くなら私たちも見逃してやろう。ここで自殺に等しい行為をするか、引くか。まあ、答えは決まってるだろうけど」

「……ツツ！」

ヴィクトルはそのまま背を向け、去っていった。

「よえーなー。軍人ならお国のために命捧げるよ」

「軍人だって恐怖心くらいあるだろうよ、司狼」

ロートスがそう言った。

「なんだよ、蓮、いたのかよ」

「いちや悪いかよ」

「別に悪くねえけどよ、この偏屈姉ちゃんに危険が迫ってるってのに傍観してたって思うと、な」

「まあ、こつちだつて色々あんだよ。つーかなんでお前来たんだよ。前にも言ったよな自殺の手伝いは御免だつて」

日本にいた頃、司狼がまだ聖遺物と契約してない時に、聖遺物の使徒であるヴィルヘルムと戦おうとしたことがあった。その時にロートスを頼つてきたから、自殺の手伝いは御免だと言ってあしらつた事がある。

「別に、俺は簡単に死ぬわけじゃなし？いいだろ。この状況だつてデジャヴなんだからよ」

「…そうか。だが、一般人のお前を向こうの戦場に連れていくことは出来ないな」

「そうかよ。俺も軍に入りたいたいんだがなあ」

露骨にガツカリしてみせる司狼。

「…だが、聖遺物の使徒としてなら連れていくことが出来る。ラインハルトとは顔見知りだろ？」

「ん？ああ、何度か会ってる」

「なら話をつけておく。狼ゲオルギウスを司る者を連れて行くつてね」

すると、おもちゃを見つけた子どものように目を輝かせ、

「これで強いヤツと戦える！ありがとな」

とロートスに感謝をした。

「櫻井は？さっきの攻撃で精神的には大丈夫か？」

「ええ、大丈夫。それより、さつきと行った方がいいんじゃない？もし、さっきの：ヴィクトル？があつちに行つてたら苦戦を強いられるのは目に見えてるよ」

「そうだな。じゃあ行くか。念の為、俺は序曲で先に行つておく。お前らは追いつき次第、交戦を始めてくれ」

「了解」

ロートスは歩きながら詠唱を始める。

「Die Sonne toent nach alter
Weise In Brudersphären Wettgessang.
Und ihre vorgeschriebene Reisesvollendung
Und schnell und begeriflich schnell
In ewig schnelllem Sphaerenlauf.
Da flammt ein blitzendes Verheeren
Dem Pfad von der Doneschlags;
Da keiner dich hergruenden mag,
Und alle deinen hohen Werke
Sind herlich wie am ersten Tag.
Briah—Eine Faust Overture」

詠唱を終えると、ロートスが青い光に包まれた。

「じゃあまた後で！」

そう言うと、時速300キロは軽く超えているだろうスピードで駆けて行つた。

「俺らも行くか」

そう言つて櫻井と司狼はロートスを追いかけるように駆けて行つた。

焦熱した世界

「せやー！ー！」

華奢な女子がエレオノーレに斬りかかった。

「ふん」

それをエレオノーレが避ける。

「くッ」

「その程度か？拍子抜けだな。聖遺物を使っていると聞いて、さぞ強いんだろうと思っただが…。私が出るまでもなかったな。ブレンナー、あとは任せた。私は帰る」

「に、逃げる気か！」

「逃げる？ハッ！貴様のような相手如きに、私が怖気付くはずもない。戦力の温存と云ったところだ」

少女に背を向け、立ち去るエレオノーレ。

「う、うおおおおお!!」

尚も斬りかかってくる少女。

「目障りだ。パンツァー」

エレオノーレは、無数の擲弾発射器パンツァーファウストを空中に出現させた。

「foyer」

全ての擲弾発射器が一斉に少女に向かって発射されていく。

「う、あああああ!!」

「そのまま死ぬ。哀れな少女よ。まだ生きているとなれば、ブレンナー。貴様が殺せ」

「…了解よ」

「…つつ…」

少女はまだ生きている。聖遺物の使徒なのだ。これくらいで死ぬことはない。尤も、相手が黒円卓の赤騎士ザミエルなのだからかなりの重傷を負ってはいるが。

「くッ…創造…」

辺りに流れている川が波を立てる。

「ほう」

「消熱・水冷清浄！」

川から水柱が立ち、雨雲が雷鳴を轟かせる。

「序盤で心が折れて創造か。とんだ腑抜けだな。見るところがありそうな創造だが、私の心は変わらんぞ」

「こ、怖いのか…！私に負けるのが…！」

「ハッ！どうとでも言え。あとはブレンナーがやってくれるさ。私が出す程じゃない」

「ふふっ。それはどうかな」

エレオノーレがリザの方を見ると、リザが動きを止めていた。

「おい、ブレンナー。早くやれ。私は引くからな」

「エレオノーレ。あなた何を言っているの？自分でやればいいじゃない」

「なに？」

「なによ。権力を振るって他人にやらせるなんて怖気付いてるだけじゃない」

少し様子がおかしい。

(さつきまで命令には従う姿勢を見せていた…)

「創造、か…」

「カイン！」

トバルカインを使い、攻撃してきた。

「ブレンナー、上司わたしの命令を聞け！」

「上下関係なんてどうでもいいわ。私は…私のためにこの身体を使う！」

再びカインが攻撃しようとしたその時、

「あくあく。こっちも大変なことになってんなあ。めんどくせえけど、太極使うかー」

どこからか聞いたことのある声が聞こえてきた。

「この声は…」

すると、空から雨雲が消え、その空に幾何学模様が刻まれた。

「はっ…！私は…なにを…？」

「助かったよ。ゲオルギウス」

「どういたしました」

「私の創造が…？なんで…!!」

少女は叫喚していた。

「つーか、シスターさんがおかしかったの、お前のせいじゃねえだろ」
「なにを…。私の創造よ！」

「あいつ…なんつったか。…ああ、ヴィクトルだ。あいつだろ。いんだろ！出て来やがれ！」

すると、一般ソ連兵の1人が首のあたりでゴソゴソし始めた。

「聖遺物を変装道具にしていたのか。わざわざそんなことする必要あつたか？」

「またあなたなの!?私の邪魔はしないでっいつも言ってるじゃない！これは私が受け持った戦いの!!」

「お前は…戦いに向いてない。渴望も、おそらく『他人を引きずり落として自分が強く』ってところだろう。だから『炎（情熱）を消す』なんて創造になつたんだろう。だが、戦場ではそういったセコイ手は通しない。私のもそうさ。先程、その彼に切り崩された。彼がいなるところならばと思つたんだが…。まあいい。そういう事だ」

それでも少女の熱は収まらない。

「あなたには関係ない！大将閣下に任されたのは私！人の管轄に…手を出さないで！」

『口を噤め！瑞騎！』
みずき

少女——瑞騎が口を閉じた。

「お前は自分自身に創造を使えないのか！敵がいるところで弱みを見せるんじゃない！」

瑞騎がゆっくりと口を開ける。

「わかつたよ。私が悪いんだろ！もう知らない！」

そのまま瑞騎は駆けていく。

「瑞騎！」

「あらら。仲間同士で…」

「…司狼。少し黙れ」

「はいはい。了解しましたよ。副首領代行殿」

嫌味つたらしく言う。

「ちつ。反吐が出る。敵を前にして、仲間割れか…」

そう言うどエレオノーレは詠唱を始めた。

「Echter als er schwur keine Eide;
treuer als er hielt keine Verträge;
lauter als er liebte keine andere;
und doch, alle Eide, alle Verträge,
die treueste Liebe, alle Verträge,
Wit inr, wie das ward?
Das Feuer, das mich verbrennt,
rein, gevom Flucheden Ring!
Ihr in der Flut set auf,
und lauter bewahrt das Licht Gold,
das euch zum Unheil geraubt.
Denn der Götter Ende munter nun auf.
So | werf, ich den Brand
in Walhalls prangende Burg.
Briah |
Muspellzheimr Lvatenn」

すると、その場にいる全員が砲身状の結界に閉じ込められた。

「貴様ら敵兵に情など湧かん。軍人が、戦場にいる時に仲間同士で喧嘩をするなど空前絶後、言語道断。すなわち、論外だ。貴様らの軍の大將閣下殿も要らぬと思っっているだろうよ。故に私が燃やし尽くしてやる」

「——！」

ソ連軍の兵たちは絶句している。その場に立ち尽くす者、結界を壊せないかと試みる者。聖遺物の彼らは絶句する者だ。

「私の炎は相手が死ぬまで焼き続ける。貴様の創造は役に立たんぞ」

「そんなの——」

「俺がいりや創造は使えねえな」

司狼がいつの間にかあちら側にいた。

「もしかしたら、少佐殿の創造も消してしまうかも知んねえが…。まあそんな時やそんな時だ」

「分かっているじゃないか、ゲオルギウス。では、D r e i³ Z w e i² E i n s¹——」

カウンントダウンを始め——

「——F o y e r^撃」

——炎を敵兵に向け、撃った。

「マリグナントチユーマーニアポトシス無間身洋受苦処地獄」

遠くの方で司狼の詠唱が聞こえたかと思ったら、結界の中に幾何学模様が浮かび上がった。

「さあ、帰るぞ」

エレオノーレがそう言った。

「結果を見なくていいのか？」

「見なくてもわかるさ。君の友人がへマをやらかさない限りな」

「そうか…」

聖劍七兵団

「ふう…。砲撃は…終わったか。さて、俺も帰るとすつかかなあ」
もぞで…もぞで…

「うわ！まだ生きてやがんのか。まあ、もう面影もないがな」

司狼は拳銃で、動いていた元は人間だったであろう灰を撃った。

「やはりドイツ軍の聖槍十三騎士団は強いな。まだ素人の聖遺物使いとはいえ、二人同時に倒すとは…」

1人の老翁が言う。

老翁の名はマクベス・スヴオール||ゼウス・オリュンポス。ソ連陸軍中將。

「でも、アタシ達がやれば大丈夫でしょ。さつきやられた彼ら、本当に雑魚じゃない」

若い女がそれに答える。

女の名はオフイーリア・ナクラル||ミカエル・タルムード。ソ連陸軍少將。

「油断は禁物です。彼らはボクらよりも前にそれらを手にし、使ってきています。扱い慣れているのは目に見えている」

少年がそれに反論する。

少年はシーシアス・ナクラル||アイギス・アマルテイア。ソ連陸軍大將。オフイーリアの弟である。

「しかし、勝つのはボクら聖劍七兵団だ。なぜならば、我々の方が人数が少ないゆえに結託が強い。連携が上手い。そして、コレ^の質が高いからだ」

腰にある刀を掲げ、シーシアスが宣言する。

「ボクらは彼らのように力がおしくはない。だから、創造は使って構いません。本当に隠すべきは——」

「——流出だ」

マクベスが青年の言葉を次ぐ。

「儂らの2人が流出に至っておる。正しくはオフイーリア嬢の軍勢変生であるが。それでも途中で中断できるというのは優秀すぎる。乱

用はできん」

「そういう事です。さて、既にアトランティア兄妹は向かわせているのですが、どうしましょうか」

カムイ・アトランティアⅡルシフェル・エザキエル、カノン・アトランティアⅡアイリス・エレクトローラー兄妹。ソ連陸軍の大佐と中佐であり、聖遺物の使徒である。

「根城を襲わせればいいんじゃない？ルシファーもイリスもそっちの方が手っ取り早いと言ってたし」

「いや、彼らの意見は飲めない。彼らならば敵軍兵を大量に倒せるだろうけど、L:D:Oの団員が出てきたらいくら彼らでも負ける可能性がある。ここでの消耗はいただけないよ。姉さん」

「まあ彼らに任せてみようじゃないか、シーシアス殿」

マクベスが意見する。

「そうですね。少し様子をうかがってみましょう。なにか動きがあれば、僕が出ます」

「ええ…。なんで大将殿が出るとか言うかな…。アタシかマクベスにやらせりやいいじゃん」

「姉さん、僕はね、早く蓮と戦いたいんだ。きつと呼び出せば出てきてくれるはずだし、僕も待っている。お互い、軍の良い役割についているから、実現できるかはアレだけど、僕は戦いたいという意思を見せてるから…ね？」

「旧友に会いたいというのなら、僕は止めんよ」

マクベスは納得してくれたようだ。

「ちよつ。ジジイ！」

「これはシーシアス殿が郡の将校としてではなく、一人の人間として願っていることだろうか？だったら、叶えてやろうではないか。君も姉として応援してやるといい」

「…。そこまで言われちゃあしようないね」

マクベスの説得が効いたのか、すぐに折れてくれた。

「ありがとう。でも、今はアトランティア兄妹のことについて集中し
ましょう」

ヴェヴェルスブルグ城の付近にあるカフェのテラス席に、2人の若者が優雅にお茶を飲んでいた。

「お兄ちゃん、ヴィクトルと瑞騎が殺されたんでしょ？で、私たちがここに飛ばされた。こんなところで見てていいのかしら？」

銀の髪と紅い瞳を持つ少女が、同じく銀の髪と紅い瞳を持つ隣にいる少年に問う。

「うーん…。でも待機命令が出てるからなあ…。俺としてはさっさと特攻したいんだけど…」

「私もよ。そんな命令、無視しちゃおうよ」

「ダメだよ、カノン。無視したら何をされるか分かったもんじやない」

と、少年がそういったところで、少年の携帯電話が震えた。

「シーシアス君からだ。『アトランティア兄妹へ』…？命令の伝達かな。『先程の会議で、君たちの待機命令を解除することになりました。次の命令があるまでは自由に行動して構いません。しかし、一つだけ命令をします。特攻するなら二人同時には避けなさい。それをやった場合には強制的に帰還、あるいは殺させていただきます。ボクとしては、なるべく後者はしたくないので、この命令には従ってください。シーシアスⅡアイギスより』。自由行動だって。どうする？」

少年が少女に問う。

「えー…。2人で行きかけたんだけど…。敵の情報を探る為にも、私、行こうか？」

「カノンを死なせる訳にはいかない。俺が行く」

「私だってお兄ちゃんを殺すわけにいかないわ」

「…じゃあ待機だな…」

全く話が進まないの、振り出しに戻った。

2人が再び談笑し始めると、彼らの横を黄金の髪の男性と青い髪を持つ影のような男性が通った。

「カール。なにか思い出しそうか？」

「いや、なにも。すまないね、ラインハルト。付き合わせてしまって」「このくらい良い。親友が記憶喪失なのに動かないというのもなんだ

ろう」

彼らはこのような会話をしていた。

「ねえ、お兄ちゃん。黄金の髪に、ラインハルトって名前。あの人聖槍十三騎士団の第一位かも知れないよ」

「ここでやれば苦労はないけど…。ちよつとカノン、行ってみてよ。お前の創造なら、殺せなくとも、なにか出来ると思う」

「分かった。創造——」

青空が、さらに濃い蒼に変色した。

「La^神divina^奏commedia^{至上の曲}
Purgatorium^{煉獄}ed」

「おや？なにかが変わったようna——」

メルクリウスが気づく。

が、その直後、時が引き伸ばされ、ずっとaの音を言い続けている。首も細かく動いている。

周りの人間も皆、最後に発した言葉の母音を言い続けていたり、最後にした行動を繰り返している。

まるでバグったゲームのように。

「私の創造は3つある。一つはこの「周りの時間を引き伸ばす」という『煉獄』。一つは「お兄ちゃんが死ぬまで私も死ねない」という『地獄』。私にとつては天国だけだね。一つは「今までに見た事のある創造を（オリジナルには劣るが）使うことが出来る」という『天国』。今のこの空間は、私とお兄ちゃん以外誰も動けない！」

ラインハルトの元に走っていき、剣を形成しつつ、つつ、腰から肩にかけて、ラインハルトを斬る。

「せやああああ！」

腰に当たったが、そこから先に斬り込めない。

「なんで!？」

「カノン！さがれ！」

後ろからカマイの声が聞こえる。

驚異の跳躍力で後ろに飛び上がり、200mはあるであろう距離を一回ジャンプしただけで詰めた。

「座れ。彼は魂の質、そして量が違いすぎた。あれは俺でも無理だ」
「そんな…じゃあ私たちはどうすればいいの?！」

母音を奏でることしか出来ない人形どもが、奇妙な動きで母音を奏で続けている。

「…そうだな…。まずは、少し落ち着いたら、創造を止めてくれないか。…気分が悪くなってくる」

蒼い空が薄くなっていく。それにつれて街の人たちも動き出す。

「さて、宿舎に戻ってシーシアスたちに報告をしようか。行こう、カノン」

「待ちたまえ」

カフェのテラス席から立ち上がり、街に繰り出そうとしていた彼らを誰かが止めた。

「卿ら、先程、ここで起きたことについて何か知っているかな?」

それは先程襲った黄金と影だった。

「起きたこと?何かありましたか?」

「私たち、ここでお茶して、話が盛り上がっていたので分かりませんわ」

努めて平静を装った。カノンの口調が少しおかしいのは目を瞑っておこう。

「そうか。その彼女だと思っただがな。気のせいだったかな」

気づかれていたのか?!いや、創造は展開されていたはず…。なら、こいつはなんなんだ!

「まあ良い。力及ばず。腰から斬ったのだろうか、ミリ単位でも斬ることができなかったのだから、相手にはならんだろう。貴重な時間を取ってしまったすまなかったな」

そう言うと2人は去っていった。

「バレてたの…?私の…創造が…」

「分からない。ただ痛みがあったからってだけかもしれない。彼は狙われて当然の存在だからね」

「でも、その彼女だと思っただって言っただじやない」

「ハツタリだろ。俺らが動揺するか見てたんだろうな。まあ、事件の

犯人に仕立て上げられたら誰でも動揺するだろうけどね」

無駄な時間を過ごした…。報告する時間も少し削られてしまったな…。

「時間が惜しい。早く宿舎に戻ろう」

「やはり、敵国の兵が紛れ込んでいたか」

「彼らはいま、裏で戦争をしている国の兵だと言うのですか。ラインハルトよ」

カムイたちに話しかけた後、黄金と水銀はそんな会話をしていた。

「ああ。だが、取るに足らない相手だった。卿の力を借りずとも、倒せるだろう。聖剣七兵団があ程度の度で終わるはずはないと、私は思うがな」

「私が記憶を失っていないければ、何か出来たと思うのだが。いやはや、申し訳ないね」

「なに、気にすることは無い。誰にでも起こりうることだ。気に病まなくても良からろう」

「おーい！ラインハルトー！」

後ろから声をかけられた。

そこにはドイツ軍の軍服に身を包んだ者が5人いた。

「ツアラトウストラか。終わったのか？」

「ああ。弱すぎた。戦ったのはザミエルとレオンハルト、そして戒さんくらいだ」

「そうか…」

明らかにおかしい。もう少し強かったと思うのだが…。

「まあ…良い。ああ、ゲオルギウスも戦ったのか」

「なんでわかった?!」

「なに、彼の聖遺物の反応があったからだよ。それに、少し前、空気が変わって形成が出来ない状態になっていた。太極を彼は使用したようだな」

「ああ。何度かな。ところで…」

そこからはただの雑談になった。

しかし、ラインハルトの頭の中はソ連軍のことについていっぱい

だ
っ
た。
。